

【大学入試センター試行調査・第2問(著作権法について)】

2021年の本試験現代文問題は、大問1題をほぼ10分で読み、10分で解くという設定で作問される(試行調査では数分短く設定されている)。複数資料タイプの出題によって解答時間不足となるおそれがあるので、「資料」「図表」の類に振り回されないようにしたい。あくまでも『『国語総合』の範囲からの出題』なので、メインの「文章」の読解に対してより集中するのが基本である。「資料」や図表などは、実質的にはメインの「文章」にとっての具体例や補足資料であるから、読解段階では設問解答時に関連箇所の見当がつく程度に目を通しておくとよい。

問2 設問要求に「資料Ⅱを踏まえて」とある。実際には「表1」を見ても解けてしまうが、解答法の基礎通りにまず傍線部の主題「著作物」を確認してから「資料Ⅱ」の著作物の定義を参照する。「思想又は感情を創作的に表現したもの」とある。

問3 傍線を付さない設問は本試験での出題可能性が高い。傍線部がないので正解の必要条件を限定しにくく、各選択肢を正誤判定するのに多少時間がかかるが(2分程度)、客観的読解法のマーキング作業を行いつつ、文章全体の主題である「著作権」について意識的に読むという最低限の基本ができていれば、「利用/使用」、「テキスト(にとどまらない)」、「無方式主義」、「表現/内容」などのキーワードは押さえられるので、①「利用」についての誤り、②「テキスト」に限定する誤り、③「明確な判断を下すことができる」という誤り、④「DNA配列」の例示の意味の誤り等は簡単に判定できる。

問4 典型的な複数資料タイプの問題。「表2」について、「文章」で説明されている箇所(8・9)のキーワード(読解法マーキング箇所)を参照すると、「叙情詩モデルの特性」「著作物性」という正解内容がすぐにみつかるといえる。

問5 センター試験では問6の(i)で出題されていた「表現の説明」問題である。具体例・引用・比喩、記号の使用による強調(——)、「対比」など、客観的読解法の意味を理解しつつ用いていけば、正誤判定は難しくない。自習は、必ず本物のセンター試験過去問題を用いて行うこと。

問6 問4と同じタイプの問題である。これもまた「文章」の最終意味段落(15~17)「利用/使用」の説明さえ読解できていけば、「報酬・利益の発生しないもの」に限定すればよいと分かるはずで、平易である。また、空欄aとは「著作権の例外規定」を主題とする箇所なので、「資料Ⅱ」の「第三十八条」の記載を見ればよいと気づけば、さらに簡単である。いずれにしても、こうした問題が「新しい学力」「実用国語」「主体的な学び」などと称されているものの実質である。難しく考えることはない。必ずセンター試験の過去問題(2015年度以降の本試験・追試験)を徹底して解く訓練をしておこう。

【大学入試センター試行調査・第3問(詩とエッセイ)】

2021年本試験の大問2では、「文学的な文章」として「小説」「随想」「詩歌」等の複合出題となる可能性がある。文学的な随想と詩歌を関連付けた出題なども想定される。いずれにせよ、まずは小説本文の読解と、心情説明・表現説明の設問解法の基礎習得が先決・必須である。新テストの見た目の複雑さは問題ではない。本物のセンター試験過去問題に当たろう。

問2 設問要求に「エッセイの内容を踏まえて」とある。ここでも大問1と同様、メインの文章から解答根拠を見つけ出せということである。「ひと夏の百合を超える永遠の百合。それをめざす時のみ、つくるといふ、真似るといふ、不遜な行為は許されるのだ」とある。有限な人が「永遠」を「つくるといふ」ことを「不遜」と述べているので、②・⑤であり、何を「永遠」に残そうとするかといえ、「ひと夏の百合」であるから、②が正解である。

問3 傍線を含む一文の確認という解法上の最も基礎的な作業をきちんと実行すること。「枯れないものは花ではない。〈それ〉を知りつつ枯れない花を造るのが、つくるといふこと」である。④「対象(花)を超えた(枯れない)もの(アート・フラワー)を生み出すこと」である。

問4 問3同様、傍線を含む一文の確認という基本作業をきちんと実行する。「個人の見、嗅いだものをひとつの生きた花とするなら、〈それ〉はすべての表現にまして、在るといふ重みをもつに決まっている」から、傍線部は「すべての表現(=造花・芸術表現)」に対するものとしての、実際に人が色や匂いを経験した「ひとつの生きた花(=実在の花・現実)」である。

問5 問3・問4と同様、傍線を含む一文の確認という基本作業を実行する。まず「——ただし、(と私はさめる。～)」という一文の確認から、「何に対して、どう『さめる』のか?」を、読み進めればよい。「私」の永遠は、たかだかあと三十年〜でよいと「さめ」ている。「時代を超えて残る」ことへの違和感、「自分の感性も永遠ではない」という④が正解である。

問6 センター試験の問6と同じ「表現の説明」問題。表現技法に関する基礎知識とある程度の問題練習は必要である。ただし、「表現技法に関する基礎知識」は講義とセンター試験の過去問題から学べる。自習では必ずセンター試験の過去問題を用いること。(i)「演繹」「帰納」は論理的概念であり、「詩の表現」技法ではない。②の倒置法や反語が詩の中に見つかる。(ii)②は「私」が「第三者的な観点」に立つのに、「私」が「混乱し揺れ動く」はずがない。③の「——」は、言葉を省略した「余韻」ではなく「もどす」という言葉の強調である。④「私」のは、「永遠」に対する「筆者の(行う)解釈」ではなく、「筆者の(所有する)永遠」という助詞の用例である。